

Title	「意識に直接与えられたものについての試論」の問題と身体
Author(s)	桑原, 英之
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2005, 39, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10198">https://hdl.handle.net/11094/10198</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『意識に直接与えられたものについての試論』 の問題と身体

桑原英之

## 序

本論文は、ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』と略記）の困難を、空間を特徴付ける二つの論理的必然性（1. 不可入性と、2. 同時性）を検討することにより、物質と空間の同一視にあることを明らかにする。しかしそのなかにあつて、身体の、特に筋肉努力の議論の特殊性を示したあと、その困難を解決する萌芽があることを論じる。

## 1

『試論』において空間は、二つの論理的必然性、不可入性と同時性として示されている。最初に不可入性という特性からみてみよう。持続の本性を相互浸透として捉えるなら、その相互浸透と対になるのは、相互外在性（l'extériorité réciproque）である。相互外在性とは、つねに何かの外として存在し、何かの外部として規定され、その何かもまたその外部という仕方においてのみ、存在することができることを意味する。この互いの外的な、互いが互いに対して「外」という関係性においてのみ存在する相互外在性の特徴として挙げられるのは、ある固定された「境界」や「輪郭」をはっきりと示すということにある。そして、その互いに外的な、それ以

上浸透することのできないという排他的性格を示し、侵入することが不可能な、明確な境界を形づくることができるもの、数的（量的）多数性（多様性）を形成させるものは、「不可入性」である。ただし、周知の通り、不可入性について言及しているのは、『試論』第二章の中のわずかな頁である。しかし、そしてなにより、『試論』は空間と物質をともに区別することなく「外部」へと追いやるわけだが、結果、空間と渾然一体とした物質はその実在がきわめて危うくなるなかで、しかし、その外部の特徴を規定する相互外在性の本質をなす不可入性という論理的必然性という観点において、物質と空間を区別する視点もあったことが同時にかいま見えてくる。詳しくみてみる。

相互に浸透するものが継起を本質とするのに対して相互に外在的なものは決してそれ自体継起しない、というのが『試論』の基本路線である。そして「相互外在性」(cf. DI. 93)の本質とは、それ以上侵入できない境界としてのまとまりであり、その境界そのものである。それをかたどるのが「不可入性 (impénétrabilité)」(DI. 65-67)である。真の意識の内にある状態は「相互に溶け合い (se fond) 浸透し合 (se pénètrent)」(DI. 98)っており、「はっきり決まった輪郭」(ibid.)をもったかたちを有することができないが、それに対して事物や物体はもはやそれ以上浸透することが出来ない不可入性につきあたる。その不可入な境界がそのまま各々のあるまとまりを示す境界となり、空間内部に限局される。不可入性をベルクソンは次のように定義している。「それは物理的次元での必然性ではなく、2つの物体は同時に同一の場所を占めることができないという命題に結びついた論理的必然性なのである」(DI. 66)。これの意味するところに注意が必要だろう。というのも、事物や物体が各々持つ個別的境界をこのように「論理的必然性 (une nécessité logique)」と言い切ってしまうことは、事実上、物体や事物（そして私の身体も例外なく）のもつ侵犯できないまとまりに関

して、「明確な輪郭と不動性」(DI. 97)をもってあらわされる形を、物質の特性として認めないということを含意しているからである。

「もし不可入性が現実には物質の一性質で、感覚によって知られるものだとすれば、なぜ私たちが抵抗のない表面や重さのないはかれない液体とかを考えるより、相互に相手のなかに溶け入る2つの物体というものを考える方にいっその困難さを感じるのかが分からなくなる。」(ibid.) 実在しないものの可能性の中で、不可入性を明確に差異化させていることがわかる。ベルクソンが用いる言い回しに倣えば、重さや抵抗といった物質の性質のように、実在する性質とは本性の差異があり、そもそも物質の実在性には関与しない。「この性質〔不可入性〕を物質に帰属させ、物質を物質でないすべてのものから区別しようとしたところで、それは、数のうちに直接翻訳されうる拡がりのある事物と、まず空間のなかの記号的表象を含む意識事実とのあいだに、私たちが先に打ち立てた区別を別の形で言い表しているだけのことである。」(DI. 67) ここで「先に打ち立てられた区別」と述べられているのは「意識事実」(DI. 65)と「物質的対象」(ibid.)とにおける多様性の区別のことである。ただし、意識と物質との区別を考える時、「不可入性」が両者を隔てるのは、空間化させる空間の論理としての不可入性による区別である。可入性にもとづく物質についての思考(想像)が存在しないように、意識の記号的表象もまた不可入性を共有し、それを含みもった事象である。「観念的空間」(DI. 64)、または記号を空間内に配置する「補助的な空間」(DI. 81)の中で行う記号的表象のもつ相互外在性と、「空間のなかに限局された」(DI. 64)物質的対象にみられる相互外在性の間には本質的差異がない。だから、区別されるのは、論理としての不可入性が示す相互外在性と、持続の本性たる相互浸透の間である。

以上から分かる通り、不可入性は物質のもつ性質ではないし、不可入性は物質の実在を保証するものではない。あくまで、不可入な仕方では表さ

れるものを、物質と呼ぶのである。『物質と記憶』では、知性の働きに対するプラグマティックな視点を知覚にも当てはめ、欲求に基づく知覚による分割であることをはっきりと述べるようになるのは周知の通りである。では物質の实在、今我々が確かに目にしているあるまとまりをもった個物たる物体の存在はどう考えたらよいのか。繰り返せば、これに不可入性で答えることはできない。この点に関し、『試論』では、空間化の論理と物質そのものの区別があまりない。空間化として批判対象となる空間と物質との差異であり、物質と精神双方に共通して働く空間化の論理と、物質と精神双方の实在の間の差異の問題である。ベルクソンも承知していたのだろう。

『試論』第2章で、例えば「私たちの感覚は物体の諸性質を知覚するし、またそれらとともに空間を知覚する」(DI. 68) と述べて延長の知覚と空間の知覚を微妙に区別したり、或いは等質空間という知性に固有で「格別な風変わりな」(DI. 72) 空間(ないし「環境 (milieu)」と、「私たちの経験の基底 (le fond) そのものをなすような」(ibid.) 質のある空間や環境を区別しようとしたりする。しかし『試論』全体としては、両者の差異にあまり頓着しない。両者は全体を通して「外的世界 (le monde exterieur)」(cf. DI. 116) ないし「外的対象」(cf. DI. 92) といった「外」へ、或いは「外的」と形容される表現へと一括されていく。ここに、例えばときには「質的差異は自然の至るところにある」(DI. 72) ことを認めながらも、両者のズレをうまく処理し切れていない『試論』の困難が浮かびあがる。意識に関しては、記号的表象や言葉を操作すると同時にみずからも統覚するような自我を「表面的自我」(cf. DI. 94) と呼び、程度の差を容れ、深い自我との関係を探りながらも、慎重に精神の实在と表象のための知性の論理の区別をたてたのとは対照的である。

## 2

もう一つの空間化の論理、同時性についてもみておこう。「空間のなかには、意識が解するような意味での持続も継起も存在しない」(DI. 89)<sup>1)</sup>のであり、「継起と同時性のさなかにおく」(DI. 104)のは「不合理性をますます引き立てることになる」(ibid.)、というのが同時性と継起の対立をめぐるベルクソンの基本主張である。同時性と継起の対立は、時間が流れる(=継起する)とはどういうことか、そしてその継起のただなかにあり、そのものでもある<現在>をどのように考えるのか、という問題と関係している。「可逆性 (réversibilité)」(DI. 74 以下)の議論を確認しておこう。「純粹な継起」(DI. 75)においては、例えば「或る表面に沿って手を動かすとき、この表面に抵抗する指の摩擦と、とりわけ関節の働きの変化が私たちに一連の感覚を引き起こすが、それらの感覚は性質によってのみ区別され」(DI. 74)る。それに対して「同じ感覚を逆の順序で新たに手に入れることもできる」(ibid.)という「持続における継起の可逆的關係」(ibid.)が可能なのは「前と後とについての、もはや継起的ではなく同時的な(simultanée)知覚をふくむ」(DI. 76)のような、「分離され併置されたいくつかの項を同時に把握できるような仕方であらう空間のうちに展開されている継起」(ibid.)だからなのである。つまり「継起的なもののうちに順序がもうけられるのは、継起が同時性となって、空間のなかへ投影されているから」(ibid.)である。

上の議論において重要なことは、同時性とは時間ではなく、「同時性それ自体で相互に継起することを認めてしまう」(DI. 171)ことの誤謬である。同時性は空間の内にある対象の同時的存在、時間のある瞬間を輪切りにした時の空間内部における物質の配置だけを意味するのではなく、過去-現在-未来という継起の変化そのものを一つの空間の内(=同時性)に配列することを意味する。そのためには過去-現在-未来という時間を捨象し

等質な時間を前提とすることが必要であるが、ベルクソンはその典型例として挙げるのは周知の天文学の例である。「天文学者は例えば日蝕なり月蝕なりを予言するとき・・・科学にとっては問題とならない持続の諸間隔を無限に縮小し、こうして持続の諸間隔を生きざるを得ない具体的意識にとっては数世紀を占めるであろう多くの同時性の一継起を、きわめて短時間のうちに——せいぜい数秒のうちに——それと認めるのである。」(DI. 87)

ではこのような数世紀を占める継起を同時性へと縮小することを可能とするものは何か。それは「同じ原因は同じ結果を生み出す」(DI. 151) という「因果性の原理」(DI. 150) である。この因果性の原理が前提とするのは「同じ瞬間が二度現れる」(DI. 150) という時間の等質性であり「同じ原因が何度も繰り返す意識の舞台に登場することができると仮定すること」(ibid.) である。時間に置き直して述べるならば、過去も未来も同じ等質な現在の反復として考えられるような時間である。先に不可入性は「物理的次元での必然性ではなく、2つの物体は同時に同一の場所を占めることはできないという命題に結びついた論理的必然性なのである」と定義されていた。対して同時性は、「原因と結果との間に論理的必然性をうちたてる」(DI. 156-157) ことを可能にするもの、すなわち因果関係を打ち立てる論理的必然性だといえよう。しかし「現実の継起的諸瞬間は互いに連帯しているのではなく、それゆえいかなる論理的努力をもってしても」(DI. 156) 成り立たない、というのがベルクソンの主張である。

同時性の議論はアポリアを抱え込む。継起するものを意識という<内>に極度に限定したがために、「私たちの外部には、空間しか、したがって同時性しかみだされない」(DI. 86) ということになるのだが、その時世界の中にいかにして継起としての意識が存在し得るのか、という問題である。結論部で次のように述べている。「持続を空間のうちに置くことは、とりもなおさず同時性の内部そのもののうちに継起を位置させることであるが、

これは紛れもない矛盾である」(DI. 171)。つまり同時性の成立する世界の内>に継起としての持続を置いてしまう場合、必然的にその同時性が共有している等質時間を根本において共有することになり、人格のもつ持続の絶対性は相対化される。ではそのような持続としての意識は、この世界のどこに存在しているか。「機械仕掛けの神」(DI. 161)は「事物の外部にあってその上を飛び動く必然性」(ibid.)として批判されるが、一見したところ、全く別の意味で、持続としての意識は「自我の外、空間の中 (en dehors de moi, dans l'espace)」(DI. 80)と呼ばれる世界の外に佇んでいるようにみえる。

不可入性の議論の際に物質(ないし質的空間)と等質空間との違いに気付いているように見えながら両者をうまく差異化できなかつたのと同様、同時性の議論においても因果性の原理という論理的必然性へと帰着する同時性と、同時に換言されない外的世界の存在とが別であることに気付いていながら、両者をうまく差異化することが出来ない。その困難を自覚していることを表す、『試論』で唯一歯切れの悪い箇所を引用しておこう。「持続のうちで何が私たちの外部に存在するか。現在だけだけである。あるいはこういう言い方のほうがよければ、同時性だけである。たしかに外的事物は変化するが、それらの諸瞬間が継起するのは、それらの事物を記憶する意識にとってでしかない。・・・外的事物が持続すると言うべきではなく、こういうべきだ。すなわち、これらの事物のなかには、何か言い表したい理由があって、そしてそのせいで、私たちが私たちの持続の継起的諸瞬間にそれらの事物を考察するときにはいつでもそれらが変化したことを確認せざるをえないのだ、と」(DI. 171)。外的事物にも変化があることを認めつつもそこに継起を認めることはできず、変化はこの引用直後に「相互外在性を欠いた継起」(ibid.)における位置の変化であると言いかえられるが、その「相互外在性を欠いた継起」と「相互外在性を欠いた継起」(ibid.)

との「内的浸透 (endosmos)」(ibid.) (「交換 (echange)」(DI.81)「交流 (communication)」(DI. 94) とも言い換えることが出来るだろう) が起こり、その結果生まれる「混合観念」(DI. 171) としての等質時間の発生の問題へとすりかえられてしまっているように見える。

不可入性と同時性の概念を検討することによってみてくることは以下のことである。『試論』の空間の特徴とは2つの論理的必然性としての(観念的)空間である。空間的拮がりにおいては不可入性としての論理的必然性であり、継起という時間的ひろがりにおいては因果性に収斂する同時性としての論理的必然性である。と同時にそこで突き当たった問題は、不可入性によって示される、認識に関する、表象上の空間化の論理と物質のもつ延長との区別の問題であり、同時性によって示される外部世界と持続としての変化の存在する世界との完全な分離という問題である。

### 3 『試論』の身体

結論から言えば、物質の實在という問題、内/外という、それ自体空間的表象に依拠した区別の解決(緩和)は、『物質と記憶』の課題である。では『試論』にその可能性を探ることが不可能なのかといえ、一つだけ特異な地位を占めているようにみえるもの、その解決のキーとなるものへの萌芽がある。それは、身体である。『試論』において身体に言及しているのは主に第一章である。身体は、一方で空間化の契機として記述されながらも、その量的変化自体がある質として捉え直される箇所がある。空間化からまぬがれた<真の身体>のようなものが仮定されるわけでもなく、逆に身体をもつことが(外部世界がそうであったように)そのまま論理的必然性への従属にスライドすることもなく、そして身体は空間内にあって外部世界と接触している以上、明らかに外部だが、だからといって一括される外的世界に追いやられるわけでもない、という点が異質なのである。具体

的にみてみよう。

「筋肉努力」に関して、つまり身体の動きそのものについて感じられる感覚や感情についてのベルクソンの議論 (DI. 15-20) は次の通りである。たとえ身体の特定期位において筋肉努力が行われる際にも必ず他の身体部位或いは身体全体の筋肉を緊張ないし収縮させているのであって「身体組織の特定の努力の強さが明らかによりいっそう大きくなるという意識は、本当は、努力作用に関する身体の表面がよりいっそう大きくなるという知覚に帰着する」(DI. 18)。これが心理学の事実を照らした基本的考えである。そしてベルクソンは次のように述べる。「諸君が感じていたのは、そうした段階的侵入、表面の増加だったのであり、そしてそれはたしかに実際の量の変化なのだが、しかし諸君は自分のきつと結ばれた唇のことだけを主に考えていたものだから、増大をその箇所に限局し、そしてそこに費やされる心的な力を、拡がりをもたないにもかかわらず、大ききとしてしまったのだ」(DI. 19)。ここでは興味深いことに、「心的な力」を特定部位に局限する量化 (=空間化) と、身体全体に拡がるさいの量化 (=空間化) とを、同じ量化であるという留保をつけながらも微妙に区別している。別の箇所ではこの身体全体或いは身体の表面全体にひろがる感覚について、それが量の変化というよりもむしろ質の方に漸近していることがはっきりする。「私たちは心の緊張の増加、非物質的な努力の増大を意識しているとまたしても思い込むようになる。そうした印象を分析してみよ。すると、そこには身体の表面に及ぶ筋肉収縮の感情 (le sentiment d'une contraction musculaire)、あるいはその緊張が圧迫、疲れ、苦しみというふうに性質を変えていくような筋肉収縮の感情以外のものはみいだされまいだろう」(DI. 21)。そしてこの身体全体に拡がる筋肉収縮の感情とは「感覚の増大 (un accroissement de sensation)」(DI. 36) というよりも「増大の感覚 (une sensation accroissement)」(ibid.) なのだという。『試論』第2章で

音楽におけるメロディを比喻に有機的一体化について言及する際には、「〔身体〕の諸部分が、たとえ区別されはしてもそれら緊密な結びつきそのものによって相互に浸透し合うような生き物」(DI. 75) のようであり、「音は、量たるかぎりでのそれらの量によってではなく、それらの量が提示する質によって」(DI. 79) 作用するとも述べている。さらに第3章では、精神から身体への働きかけないし移行としての意志を論ずるさいに、次のように述べられている。「観念と行動の間に、ほとんどそれと気付かれないほどのさまざまな媒介物 (intermediares) が介入してきていたわけであって、その総体が、私たちにとって、努力感 (sentiment de l'effort) と呼ばれるあの独特のかたちをとるのである。しかも、観念から努力への、努力から行為への進行は、努力がどこで終わり、行為がどこで始まるのかを言い当てることができないほど、連続的なものであったのだ」(DI. 159)

以上から分かるとおり、筋肉努力においては、量的変化自体が、ある質的变化を告げる可能性があるものとして認められている。対して物質の場合、量的変化に対して、質への移行を認められていない。質への移行を認められていないということは、あくまで認識論上の問題としてのみあるのであって、それが実在として認められ得る存在へと移行する可能性から排除されているということの意味する。物質は空間化の契機ないしは空間化そのものとして、あるいは空間化の後にそれとして表象されるものとしての地位だけが与えられているのである。対して身体は、「表象的感觉」や「感情的感觉」を空間化する契機として一方では記述されながらも、その「量」として示される筋肉努力の働き自体が、一つの「質」として提示される可能性を持っている。不可入性により分割され、同時性のもとで形成される物質の数的(量的)多数性(多様性)は、それがどれだけ積み増しされ反復されようとも、それが質へと変化することはないが、筋肉努力という身体の動きに関する量的な反復は、一つの質を形成しうる点に、決定

的な違いがある。

#### 4 『物質と記憶』への萌芽としての身体の位置

量の増大自体が一つの質としてあらわれてくるトポスとしての身体。このような身体に『試論』の困難の解決の萌芽、つまりは『物質と記憶』の先取りを読みとるのは他でもない、『試論』に続く『物質と記憶』のテーマが、あるいはより正確にはそのねらいの一つが、同書の第6版以前の序文において明確に述べられているとおり<sup>2)</sup>、身体にあったからに他ならない。それは同じく(第6版以前と同時に第7版における)序文において述べられている同書の成立過程(すなわち第2章、第3章の検討から、結果として導き出される第1章と第4章)からも分かるとおりで、身体の一部分に過ぎない「脳」の役割への吟味と検討(第2章)をもとに、記憶力の視点から照射され、あらわになる身体である。

そして、持続として、異質的連続性として時間を捉えたときの「現在」、つまりは流れとしての、数学的点ではない、厚みを持った現在とは実は、ほかならぬ、その「私の身体についてもつ意識に存する」(MM. 153)である。即ち、その現在における持続の厚み、すなわち過去と未来とともに相互浸透している現在をつくりあげているのは、行動するさいの、身体の内側から感覚と運動とが限局される「運動と感覚の体系」(MM. 153)としての身体への意識なのである。「私の現在は、本質上、感覚=運動(sensory-moteur)」(ibid.)であるのは、それは私の身体がほかならぬ感覚=運動の体系だからだ。ではその感覚=運動系であることは何を意味するのか。ベルクソンはこう述べる。「私の現在」とよぶ心理的狀態は、同時に直接的過去の知覚でもあり、直接的未来の限定でもあるのでなくてはならない。ところで直接的過去は、知覚される限りにおいて、のちにみるように感覚である。というのも、あらゆる感覚は、要素的震動の非常に長い継起をあ

らわしているからだ」(ibid.)。ここで「のちにみるように」と述べているのは、たとえば赤色という質として知覚されるものが、同時に、1秒間に400兆もの継起的振動という科学的な量として記述されうるのは(MM. 73, 230-231)、異なる2つの実在があることを示唆するものではなく、同一の実在についての、異なる2つの観点からの記述の違いでしかないという議論のことである。そしてそれこそが、二元論を緩和する鍵となる3つの対立軸のうちの一つにあげられる、量と質との対立に他ならない。両者は、同書第4章では、持続の緊張の度合いという視点に立ち、程度の差異として描き出され、緩和の道が模索される。その莫大な弛緩した振動(反復)の量を凝縮し、質へと変えるものとは、記憶力による凝縮による。まさに、量の反復としての質があわれる感覚=運動系の身体というトポスとして、あらわれてくるのである。

## 結

2つの論理的必然性という観点から明らかにしたとおり、『試論』にあって物質は空間と混同され実在として示されることはなかった。それは量的なものからし質的なものへの道が閉ざされていることによる。その中にあって身体だけが、量の増大そのものが質の形成をうむ可能性を示唆されていたのであり、その身体は『物質と記憶』で再度浮上してくる身体、感覚=運動系としての身体、先触れとして理解できるだろう。

## 注

- 1) ベルクソンの著作からの引用に際しては *Œuvres, Édition du Centenaire, 3<sup>e</sup> édition, Paris, Presses Universitaires de France, 1970* を用いるが、ページ数はそれに並記されているカトリーヌ版のページ数を記す。またDI、MMはそれぞれ *Essai sur la données immédiates de la conscience, Matière et mémoire* の略号である。

- 2) 一部引用しておく。「私たちはこの章〔= 3章〕で、記憶という適切な例にもとづいて、精神の同一の現象が、夢想と行動とのすべての中間段階をあらゆる種々異なった意識の平面に同時に、同時にかかわりをもつことを明らかにする。身体が関与するのは、これらの平面のうちの最終のものにおいてであり、また最終のものにおいてだけである。しかし精神生活の役割をこのようにとらえると、あるいは科学的、形而上学的なすこぶる多くの困難が生ずるように思われた。こんどは、これらの困難を分析することから、本書の残りの部分が生まれたのである。／・・・どうしても私たちは、身体の観念の根本的検討を企て・・・」(C. 1490)

(大学院博士課程単位修得退学)

## SUMMARY

**Le problème dans *Essai sur les données immédiates de la conscience* et le corps**

Hideyuki KUWABARA

Cet article a pour but de montrer le problème dans *Essai sur les données immédiates de la conscience* et la spécificité du corps. La critique dans *Essai* se concentre sur les deux nécessités logiques; impénétrabilité et simultanéité. Ce sont les fonds de la spatialisation et par la critique sévère envers celle-ci, la matière s'assimile à l'espace comme la quantité. Cette assimilation a pour résultat d'en menacer la réalité parce qu'elle est la durée qui se définit par la multiplicité qualitative.

Le corps dans *Essai* pourtant occupe la place spécial en ce sens qu'il suggère l'accroissement de la sensation de l'effort musculaire comme la qualité. Chez le corps l'accumulation de la quantité elle-même forme la nouvelle qualité et cette idée de corps se continue par *Matière et Mémoire*. Dans l'ouvrage, le présent qui se pénètre est la conscience du corps: le système sensori-moteur.

キーワード：身体、量、質